

宮崎市教育情報研修センター

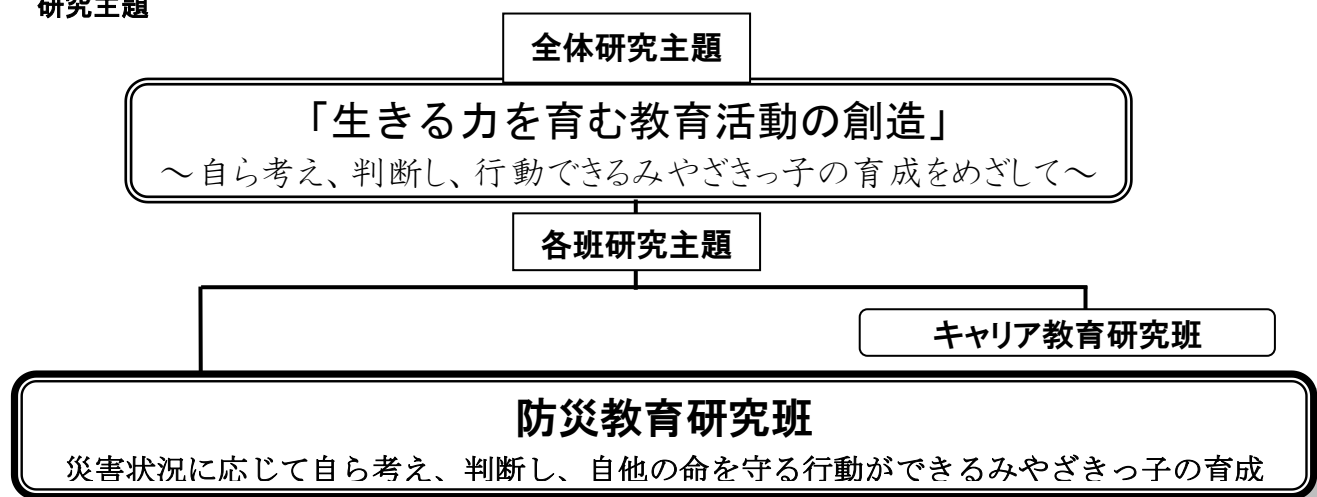
防災教育研究班

I	研究主題	・・・・・・・・	1-1
II	主題設定の理由	・・・・・・・・	1-1
III	研究目標	・・・・・・・・	1-1
IV	研究仮説	・・・・・・・・	1-2
V	研究構想	・・・・・・・・	1-2
VI	研究の実際	・・・・・・・・	1-2
1	意識調査実施・結果分析	・・・・・・・・	1-2
2	避難訓練	・・・・・・・・	1-3
3	「宮崎市防災教育手引書」を活用した授業実践	・・・・・・・・	1-5
4	継続的な指導	・・・・・・・・	1-9
VII	成果と課題		
	～引用・参考文献、研究同人～		

キャリア教育研究班

I	研究主題	・・・・・・・・	1-1 1
II	主題設定の理由	・・・・・・・・	1-1 1
III	研究目標	・・・・・・・・	1-1 1
IV	研究仮説	・・・・・・・・	1-1 1
V	研究構想	・・・・・・・・	1-1 2
VI	研究の実際	・・・・・・・・	1-1 2
1	実態調査	・・・・・・・・	1-1 3
2	めざす児童生徒像	・・・・・・・・	1-1 3
3	特別活動を中心にしたキャリア教育について	・・・・・・・・	1-1 4
4	授業研究	・・・・・・・・	1-1 5
5	児童生徒の変容	・・・・・・・・	1-1 9
VII	成果と課題		
	～引用・参考文献、研究同人～		

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められていることから、基礎基本の確実な定着はもちろんのこと、キャリア教育・安全教育など今日的課題に対して教科等を横断して指導することが重要視されてきている。

本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中に、確かな学力やキャリア教育等の充実が基本目標として掲げられている。さらに、重点目標である防災教育の充実においても、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震発生の可能性を受け、平成24年度より市内の小中学校に新たに防災主任を位置付け、「宮崎市防災教育手引書」を作成したところである。なお、平成25年度までに、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進にも努めているところである。

これらの社会や本市の状況を踏まえ、本研究班においては、平成24年度より、「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」についての究明を進めてきた。防災とは、風水害、火災などの全ての災害を防ぐという意味である。平成23年に東日本大震災が起きたことと南海トラフを震源とする地震とそれに伴う津波がいつ本市に襲来してもおかしくない状況にあることから、地震・津波に特化した防災教育について研究を行っている。昨年度は、宮崎市が作成した「宮崎市防災教育手引書」を参考に、道徳の授業の中で具体的な防災学習の場を設定したり、映像や音声を活用した避難訓練の事前指導を行ったりしたことで、児童生徒の自他の命を守ろうとする意識が高まり、より安全な避難をすることができるようになるなど、一定の成果を得ることができた。本年度は、その成果を本市の学校に確実に広めていく必要がある。そこで、防災への意識を高めるためには、年数回の防災教育だけではなく、日常指導における継続的な指導や「宮崎市防災教育手引書」の更なる活用、避難訓練の充実を図っていく必要がある。これらを踏まえて思考力・判断力を高める防災学習やPDCAサイクルを生かした避難訓練の工夫を行うことで、「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」ができると考えた。

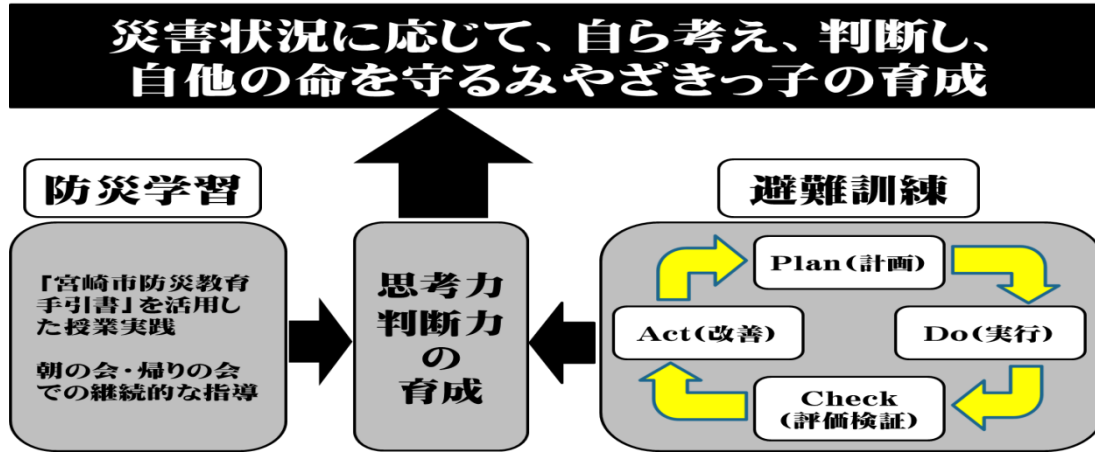
III 研究目標

「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」のために、防災学習や避難訓練の在り方を究明する。

IV 研究仮説

防災教育において、思考力・判断力を高める防災学習やP D C Aサイクルを生かした避難訓練の在り方の工夫を行えば、災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守ることができる児童生徒を育成することができるであろう。

V 研究構想

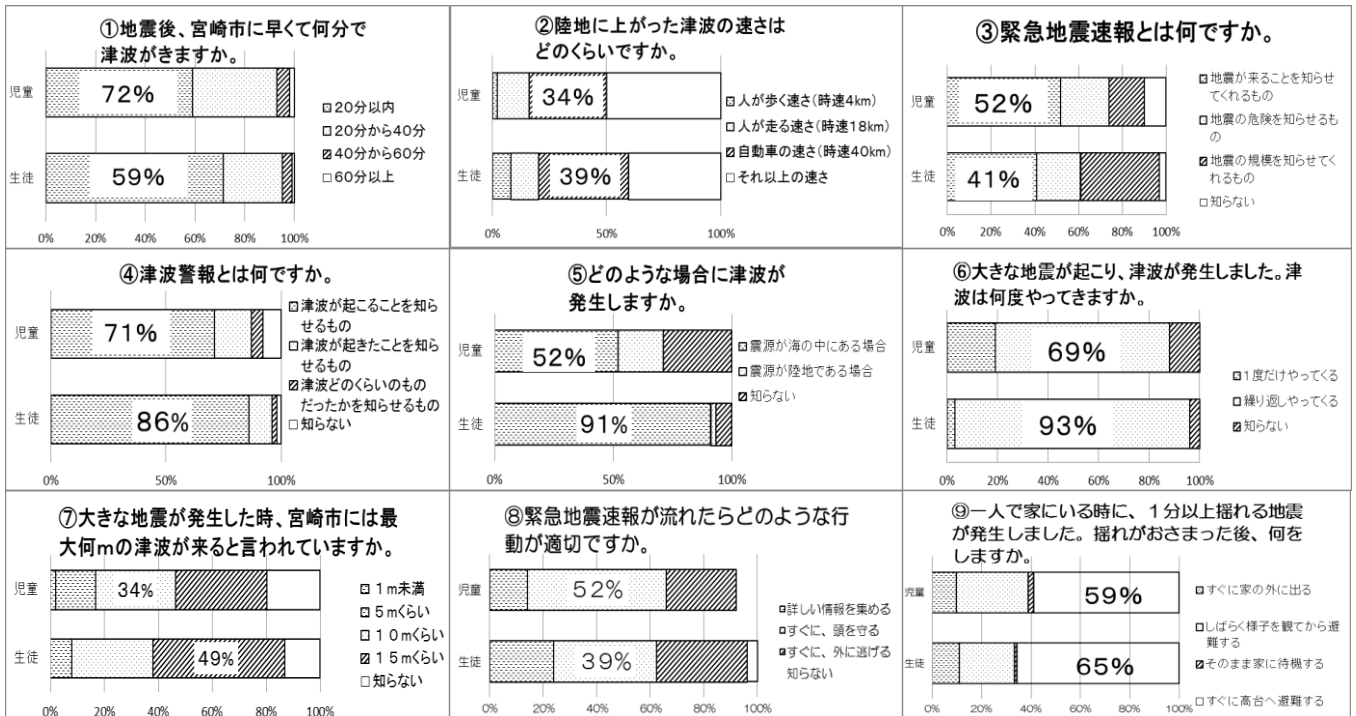


【図1 研究構想】

VI 研究の実際

1 意識調査実施・結果分析

平成26年7月に研究員の勤務する小学生(182名)と中学生(631名)を対象に地震・津波に関する意識調査を行った。下記のグラフは、意識調査18項目のうち、選択形式の項目の調査結果である。



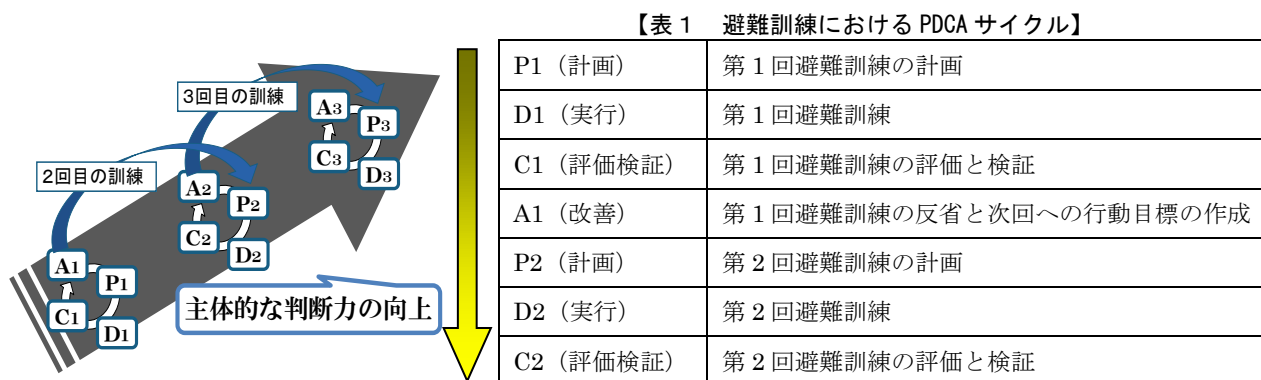
【図2 第1回意識調査結果】

これらの結果を踏まえ、地震・津波に関する知識の向上や災害時に適切な判断のもとで行動できる児童生徒の育成を目指し研究することとした。

2 避難訓練

(1) PDCAサイクルを生かした避難訓練の考え方

本研究対象校（小学校）の避難訓練では、年間で地震・津波、火災、風水害、不審者の避難訓練が行われている。しかし、その訓練のすべてが教師主導で避難するといったもので、本研究主題である、児童が「自ら考え、判断」することをねらうためには、改善が必要であると考えた。そこで、PDCAサイクルを導入した避難訓練を行い、児童自らが課題を見つけ、改善していくことができることをねらいとした。【図3】【表1】は、PDCAサイクルを図式化したものである。



【図3 避難訓練におけるPDCAサイクル】

(2) 避難訓練の実際

ア 第1回避難訓練の計画 (P1)

第1回避難訓練を行うにあたり、地震・津波に関する意識調査の分析をした結果、「③緊急地震速報とは何か。」「⑧緊急地震速報が流れたときにどんな行動が適切か。」の項目で落ち込みが見られ、本児童の「緊急地震速報」と「緊急地震速報が流れたときの適切な行動」に対する知識の低さが浮き彫りとなった。そこで、第1回の避難訓練では、この「緊急地震速報とは何か。」「緊急地震速報が流れたときにどんな行動が適切か。」という児童の実態を見るとともに、災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができる児童がどの程度見られるかを検証するために、異学年で活動を行う清掃時間中に計画することとした。

イ 第1回避難訓練の実際 (D1)

教師主導型の避難訓練ではなかったものの、「お・は・し・も」を守り、整然と避難する姿が見られた。しかし、立ちすくむ児童や、すぐに避難行動がとれない児童が見られた。

ウ 第1回避難訓練の評価及び検証 (C1)

第1回避難訓練の評価検証の結果、次のような課題が明らかになった。

- 緊急地震速報が流れても即座に避難行動に移れない。
- 緊急地震速報後、頭を守ったり、机の脚を握ったりすることができない。
- 低い姿勢で避難する児童が少ない。
- 下級生に気を配る児童が少ない。

これらの課題について、児童自ら考え改善策を見つけられるよう、児童に避難訓練の振り返りをさせることとした。

エ 第1回避難訓練の反省と次回への行動目標の作成 (A1)

上記の課題をうけ、「地震が起きた時、自分たちで、正しい身の守り方や避難の仕方ができるようになろう。」という目標を設定し、学級活動の授業を計画した。授業の導入段階では、実際の地震の映像を見せ、自分たちの避難する写真と比較させることで、児童に適切な避難行動がとれていたかを考えさせた。そこで挙げた課題を改善するには、「どのようなことに気をつければよいか」という視点で話し合わせ、行動目標を立てさせた。以下が本授業で児童が立てた行動目標と指導過程である。

身を守る姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ○ 頭を守り、姿勢を低くする。 ○ 机の下に隠れる時は机の脚を持つ。
身を守る場所	<ul style="list-style-type: none"> ○ ものが落ちてくる確率の低い場所に隠れるようにしたい。 ○ 周りにもものがない場所（で身を守る。）
避難の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 落ち着いて、体勢を低くして、避難する。 ○ 周りを見ながら無言ですばやく行動する。
他の人へ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 困っている人に「こっちだよ。」と教えてあげる。 ○ 周りの人に被害が及ばないようにする。

指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 (下線は「本時における基礎・基本を定着させる手立て」)	評価 ()は評価方法	資料準備
つかむ	1 アンケート結果や具体的な問題場面を見て、課題意識をもつ。 ・アンケート結果 ・避難訓練での問題場面	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケートの結果を見せ、自分たちの実態をつかませる。 ○ アンケートの項目を、児童に予想させることで、自分たちの課題に気付かせたい。 ○ 「教師の指示がなかったら避難できていたか」と問うことで、課題意識をもたせる。 	<p>アンケートの結果をもとに、「先生がいなかったら避難することができたか」と課題意識をもたせた。</p>	
わかる	2 本時のめあてを知る。 ・めあての設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「もし、先生がいなかったら」という場面を想定させることで、自分たちで避難する必要性をもたせる。 	<p>実際の巨大地震の映像を見せ、自分達の避難訓練の様子と比較させることで、課題を見つけさせた。</p>	
探る	3 地震の際の危険を知る。 ・物の落下・転倒・移動等 ・建物の倒壊・破損等 4 自分たちの避難訓練の問題や課題を探る。 ・誰かの指示を待つ ・正しい身の守り方 ・他者への思いやり	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>地震が起きた際、どのような危険が考えられるか、映像資料を用いて理解させる。</u> ○ <u>自分たちの避難訓練の様子を振り返り、「どのような課題があるか」を発表させる。</u> ○ 頭を守らなかつたり、窓の側でしゃがんだり危険な身の守り方に気付かせる。 ○ ものが「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」場所にすばやく身を寄せることの大切さを押さえる。 ○ 避難の仕方が分からない下級生などの存在を見せ、時には声をかける必要があることに気付かせる。 	<p>個人で考えた正しい身の守り方や避難の仕方をグループで話し合い、考えをまとめさせた。</p>	<p>映像資料</p>
どうする	5 正しい身の守り方と避難の仕方について考える。 ・個人 ・グループ	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>まず、自分の考えをまとめさせるために、個人思考の場を用意する。</u> ○ グループで話し合い、正しい身の守り方や避難の仕方についての考えをまとめる。 	<p>グループごとに次回の避難訓練に向けての行動目標を発表し、考えを共有させた。</p>	
やろう	6 グループで次回の行動目標を発表する。 7 学習のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>グループごとに行動目標を発表させることで次回の避難訓練に本時の学習をつなげたい。</u> ○ 身の守り方と避難の仕方について確認し、時の振り返りをする。 		

このように、第1回の避難訓練の課題を児童に考えさせる視点としてもたせることで、児童自らその課題に対する対処法を考え、行動目標を立てることができた。また、これまで行ってきた「お・は・し・も」の「しゃべらない」にも状況に応じて例外があることを学ぶことができた。

オ 第2回避難訓練の計画 (P2)

第2回目の避難訓練では、1回目と同様に、清掃時間の避難訓練を計画した。ここでは、自分たちで立てた行動目標を守り、教師からの指示を待つことなく、自分たちの判断で適切に避難できるかどうかの変容を見ることとした。

カ 第2回避難訓練 (D2)

第2回目の避難訓練では、多くの児童が緊急地震速報後、即座に避難行動に移る姿だけではなく、下級生を気遣いながら身を守る姿勢をとったり【写真1】、低学

年の児童の手を引いたりする姿（共助の姿）も多く見られた。さらに、頭を守りながら避難する様子【写真2】も見られ、第1回目からの改善が見られた。



キ 第2回避難訓練の評価及び検証 (C2)

第2回避難訓練の評価及び検証の結果、次のような成果が見られた。

- 第2回意識調査の結果から、1回目と比較し「緊急地震速報」や「緊急地震速報後の正しい避難行動」について、正しく理解できていることが明らかとなった。
- 第1回避難訓練で明らかになった課題を視点とした授業を計画し、児童が立てた行動目標を実践させることで、第2回避難訓練では児童の行動に改善が見られた。
- PDCA サイクルを生かした避難訓練を行うことで、児童自ら考え、判断し、自他の命を守る行動をとる児童が増えた。

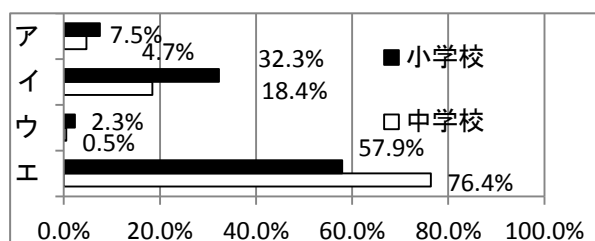
また、次のような課題も見られた。

- 廊下の窓側や、靴箱の横や教室の中央で一時避難態勢をとる児童が見られたため、窓ガラスや蛍光灯など破損や落下の危険性があるものを、全児童で確認をする必要がある。

これらの課題を、児童自らが考え改善策を見い出せるような授業の展開や避難訓練を、引き続き、年間指導計画に組み込んでいく必要がある。

3 「宮崎市防災教育手引書」を活用した授業実践

児童生徒は、年に数回行われる避難訓練を通して、校内での安全な避難方法を学習しているが、必ずしも学校にいるときに地震・津波が発生するとは限らない。下の図は、意識調査の項目⑨「あなたが一人で家にいるときに、1分以上揺れる地震が発生しました。揺れがおさまった後、あなたは何をしますか。」の調査結果である。



【質問項目】

ア すぐに家の外に出る イ しばらく様子を見てから避難する

ウ そのまま家に待機する エ すぐに高台へ避難する

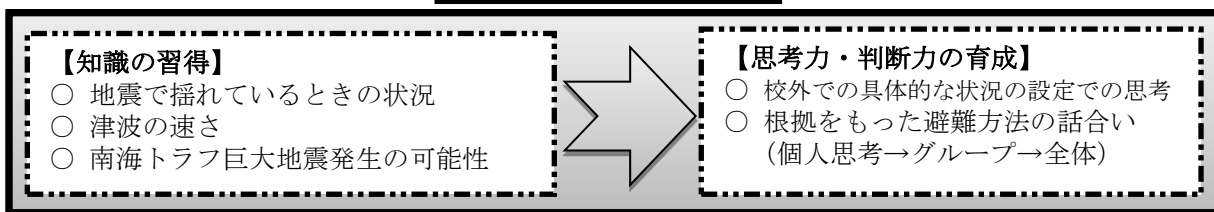
【図4 意識調査項目⑨】

「エ すぐに高台へ避難する」と正しく答えられた児童生徒が、小学校では 57.9%、中学校では 76.4%であった。このことから、学校外で地震・津波が発生した際に、児童生徒が主体的に適切な行動がとれるように地震・津波に対する知識とともに思考力・判断力を身に付けさせる必要がある。そこで、「宮崎市防災教育手引書」【特別活動 指導例 1（校外編）】を活用し、学校外で地震・津波が発生したときの安全な避難方法を考えさせることとした。

(1) 小学校での授業

ア 授業づくり

【本時の目標】
 校外で地震・津波が発生したときの安全な避難方法を考えさせるとともに、いざという時に自ら考え、行動しようとする意識をもつことができる。



イ 学習指導過程

	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 (◎評価〔評価方法〕)	準備
導入	1 地震・津波の被害について写真や動画を見る。 ・新潟中越地震の様子 ・釜石市津波到達時の様子 2 宮崎県でも、近い将来このような災害が発生する可能性が高いことを知る。 3 校内での避難の仕方を振り返る。 4 学習問題を知る。 校外で大きな地震が起こったとき、どのように避難すればよいか考えよう。	○ 地震・津波の被害から、地震や津波の恐ろしさを理解させる。 ○ 災害が他人事ではなく、近い将来に発生する可能性が高いことを知らせ、避難方法を具体的に考えることの重要性に気付かせる。 ○ 校内での避難の仕方を考えさせることで、本時の学習問題の意識付けを行う。	災害から命を守るDVD
展開	5 一次避難、二次避難、三次避難の方法について考える。 ○ 個人 校区内のスーパーで買い物をしている時に地震が発生 ○ グループ 6 グループで話し合ったことを発表する。	○ 地震が起こっているとき（一次避難）、地震が収まった後（二次避難）、津波から逃れるために（三次避難）について、個人でじっくり考える時間をとった後、グループごとに分かれて話し合いをさせる。 (◎ 安全な避難の仕方について考えている〔観察・ワークシート〕) ○ 発表をするときは、どうしてそのように避難するのか根拠を述べさせることで、より安全な避難方法について考えやすくする。	ワークシート 写真 話し合い用ワークシート
終末	7 今日の活動を振り返る。 ○ 本時のまとめ 避難のポイント 1) 地震が起こっているとき（一次避難） 地震が起きたら、まず落ちてこない、倒れてこない場所に避難して、頭をしっかりと守る。 2) 地震が収まった後（二次避難） 安全な場所へ避難をする。 3) 津波がくるとわかったとき（三次避難） 高いところに逃げる。 ※ 一度逃げたら、数時間はそこに待機する。 ○ 本時の感想	○ 子どもたちから出てきた意見をもとに、避難のポイントをまとめる。 (◎ いざという時に適切に判断し、行動しようとする意識をもっている。〔ワークシート〕)	宿題プリント

ウ 授業の実際

【知識の習得】

導入場面において、実際に地震・津波を経験したことのない児童に新潟中越地震などの映像を見せ、地震・津波発生時の状況を理解させ、学習への意欲付けを行った。また、南海トラフ地震が発生する可能性が高いことを知らせることで、避難方法を具体的に考えることの重要性に気づかせた。

【思考力・判断力の育成】

展開場面において、校区内にあるスーパーの写真を見せ、買い物をしている時に地震が発生したらどう避難するかをグループ、全体で話し合わせた。その際、より安全な避難方法を考えることができるように根拠を述べさせた。

終末場面においては、安全な避難方法について子どもたちから出てきた意見をもとに、避難のポイントをまとめた。



【写真3 グループで話し合う児童】

エ 成果と課題

終末の感想の中に、「今までは避難する場所など考えていなかったが、どこに避難すればよいか知ることができた。」「地震が起きたら、冷静に判断して高い所へ早急に逃げる必要があるとわかった。」とあった。また、授業後の意識調査の項目⑨では「高台に避難する」と正しく答えられた児童が59%から81.7%へと増えた。校外での具体的な状況を設定し、安全な避難方法について根拠をもった話し合いをさせたことで、本時の目標が達成できたと考える。

(2) 中学校での授業

ア 授業づくり

【本時の目標】

地震・津波から、正しく安全に避難するための方法・心構えを理解させるとともに、防災への自主的、実践的な態度をもたせるようにする。

【知識の習得】

- 地震・津波の発生メカニズム
- 現在危惧されている地震
- 南海地震が発生した際の被害予想
- ハザードマップの見方
- 地域の避難所・危険箇所等の把握

【思考力・判断力の育成】

- グループにおける話し合い
- 地域の危険箇所の分析
- ハザードマップを用いた、避難経路図の作成

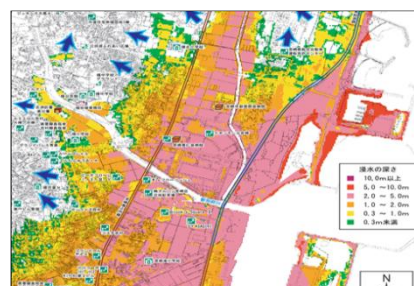
イ 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	資料準備
導入	1 前時の復習をする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時の津波のメカニズムを思い出させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・南海地震などについて確認する。 ・津波が発生した際の時間などの確認をする。 ○ 正しく安全に避難するための、ポイントを思い出させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・身を守る ・安全な場所に避難する ・短時間で迅速に避難する 	ワークシート
展開	2 本時の目標を確認する。 津波が発生した際に、正しく安全に避難する経路を考えよう。		
	3 班内で発表し、避難ルートを8班で作成させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個人で作成したマップを用い、なぜこのような経路を考えたのかなどを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・建物の中には入れるのか、大人数入ることは可能なのかを考えさせる。 ○ ホワイトボード(小)に、今回の作成で工夫した点を記入する。 	地図(小)
	4 8班から4班にし、3で決定した避難ルートを比較し、避難ルートを決定する。その他危険場所などを書き込む。 ○ 個人で作成したマップで、安全に避難するためのルートを話し合う。 ○ 班に渡したハザードマップを用い、安全な避難ルートを作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 周囲の危険箇所なども出し合い、理論的に安全だと言えるようにする。 ○ 赤、緑のシールを用い近隣の避難所と危険箇所を明確に区別させる。 	地図(大) マジック ホワイトボード(小) ワークシート シール
5 2分程度で発表し、そのあとに質疑応答の時間を設ける。	<ul style="list-style-type: none"> ○ なぜこのような避難経路を作ったのか、どういう工夫をしたかなどの理由を述べながら発表させる。 ○ 近隣の危険場所等や、避難所についても発表させる。 		
終末	6 すべての地図を張り合わせる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今回話し合ってきた避難経路が全て正しいということではないので、臨機応変に考える力が必要であるということ。また、日ごろからの準備と、地理も知っておかないといけないということを伝える。 	
	7 まとめ		

ウ 授業の実際

【知識の習得】第1時限

まず、地震・津波の発生メカニズムについて解説を行った。大地震が起きた場合や津波警報が発令された場合に、どのような行動をすればよいのか、南海トラフ地震が発生した際の宮崎市の被害予想を動画やハザードマップを用いて説明した。次に、ハザードマップの見方や地域の避難所、高台についての情報を学習した。その後、学校周辺の4か所から避難するというテーマでグループを編成した。また、次回までに避難経路の地図を作ってくるという事前課題を出し、近隣の状況や避難可能な場所なども調べてくるように指示した。



【図5 ハザードマップ】

【思考力・判断力の育成】第2時限、第3時限

生徒が作成してきた地図を用い、それぞれが持ち寄った情報(病院、道幅が狭い、危険箇所など)を地図に書き込ませた。次に、安全であるという根拠が説明できること、誰もがすぐに避難できる場所であるということに重点を置き、避難経路について話し合わせた。その後、各班が作成した地図を用いて、班で考えた避難経路とその根拠を発表させた。



【図6 避難経路図】

エ 成果と課題

話し合い活動では、それぞれが持ち寄った経路の長所や短所を指摘し合うなど、活発な議論が行われ、生徒全員が意欲的に活動する様子が見られた。授業後の感想には、「自分が考えていた避難経路が、友だちの意見で危険だとわかった」「〇〇が大切だと感じた」などがあった。また、授業後の意識調査の項目⑨では「高台に避難する」と正しく答えられた生徒が65%から96.9%となった。今回、地震・津波のメカニズムについての学習や、住んでいる地域のハザードマップ作成を通して、生徒の防災に関する知識および意識の向上が見られ、本時の目標が達成できたと考える。

4 継続的な指導

朝の会や帰りの会において、児童生徒に地震・津波に関する知識および災害時の対処法を身に付けさせるために「防災豆知識集」を作成した。その内容は、宮崎市より配布された小冊子「津波ハザードマップ」【図7】の内容を抽出・選定し、短時間で活用できるようにしたものである。継続して防災に関する事項を提示することにより、災害に対して危機意識をもたせるとともに、地震や津波に対する知識を深め、適切に避難できる児童生徒の育成を目指した。



【図7 津波ハザードマップ】

(1) 指導の実際

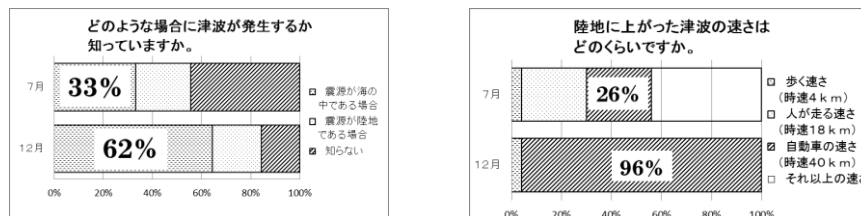
クイズ形式で問題を出題し、解説を含めて5分以内で終わる内容を週に3回程度実施した。以下が実際の問題の一例である。

第1問 地震発生後、一番早く何分で津波が来ると言われているでしょうか。 ①13分 ②18分 ③23分 ④28分	第2問 陸地上がった津波はどのくらいですか。 ①歩く速さ ②人が走る速さ ③自動車の速さ ④それ以上の速さ	第9問 宮崎市には最大で何メートルの津波が来ますか？ ①1メートルより低い ②5メートルくらい ③10メートルくらい ④15メートル以上
---	---	--

【図8 防災豆知識集の問題例】

(2) 意識調査の変容

7月と12月の集計結果を比較すると、防災に関する知識を問う設問において、小学校では正答率が8割、中学校では9割を超える項目が増えた【図9】。しかし、意識調査の設問の中で、「自分の住んでいる地域の標高」や「自宅付近の避難所の場所」など、今回の取組で触れていない項目については、ほとんど変容が見られなかった。



【図9 意識調査の結果（変容の見られた項目）】

(3) 成果と課題

「防災豆知識集」を活用し、防災に関する事項を繰り返し指導することで、児童生徒の知識の向上が見られた。ただ、今回の取組で触れていない項目に変容が見られなかったことから、

「豆知識集」の内容の見直しをしていく必要がある。

Ⅶ 成果と課題

1 研究の成果

「PDCA サイクルを生かした避難訓練」を行うことで、児童生徒に自らの避難訓練を振り返らせ、主体的に改善点を見出させることにつながった。さらに、見出した課題から適切な避難行動を、自ら考え、判断し、適切に避難することができる児童生徒の育成を図ることができた。

「宮崎市防災教育手引書」を活用した授業実践では、児童生徒が防災に関する基礎的な知識を習得できた。身近な地域での災害を想定し、安全な避難方法を考えさせることで、防災に関する思考力・判断力の育成を図ることができた。

「防災豆知識集」を作成し、朝の会や帰りの会など継続的な指導を行うことで、防災に関する正しい知識の定着を図ることができた。

2 研究の課題

今回は、3つの実践（避難訓練・授業実践・防災豆知識集）がそれぞれ単独での研究となった。より効果的な防災教育を推し進めるためには、教科等の授業や朝の会などの日常指導などと実践の場である避難訓練との連携を深めた年間指導計画を立て、それらの相互作用を鑑みて適切な時期に適切な指導をしていくことが必要であると感じた。また、これらの研究の一般化を図り、研究対象校以外の地域でも気軽にかつ有効に利用できる実践モデルを構築することが必要であると思われる。

<引用・参考文献>

- 「小学校指導要領」文部科学省
- 「中学校指導要領」文部科学省
- 宮崎市防災教育手引書 宮崎市教育委員会
- 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（文部科学省、平成22年3月）
- 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（文部科学省、平成24年3月）
- 宮崎市津波ハザードマップ（宮崎市、平成25年12月）

<研究同人>

宮崎市教育情報研修センター

所 長 江藤 宏

指導主事 金丸 賢一

研 究 員 金丸 宏美（宮崎市立大宮小学校） 黒木 秀一（宮崎市立宮崎中学校）

日高 輝海（宮崎市立広瀬北小学校） 黒田 勝彦（宮崎市立東大宮中学校）

錦織 謙一（宮崎市立恒久小学校） 小坂 俊雄（宮崎市立櫛中学校）

I 研究主題

全体研究主題

「生きる力を育む教育活動の創造」
～自ら考え、判断し、行動できるみやぎっ子の育成をめざして～

各班研究主題

防災教育研究班

キャリア教育研究班

キャリア教育を通して、自ら考え、判断し、行動できるみやぎっ子の育成
～課題解決学習を通じた基礎的・汎用的能力の向上をめざして～

II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められていることから、基礎基本の確実な定着はもちろんのこと、キャリア教育・安全教育など今日的課題に対して教科等を横断して指導することが重要視されている。

このような中で本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中に、確かな学力やキャリア教育等の充実が基本目標として掲げられている。さらに、重点目標である防災教育の充実においても、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震発生の可能性を受け、平成24年度より市内の小中学校に新たに防災主任を位置付けたり、「宮崎市防災教育手引書」を作成したりしているところである。なお、平成25年度までに、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進にも努めているところである。

これらの社会や本市の状況を踏まえ、本研究班においては、平成24年度より、「自分のよさや可能性などに気付き、自らの将来を考え、自分らしい生き方を実現していこうとする態度を育成するキャリア教育の指導の在り方」について研究を進めてきた。昨年は、体験的に働く人々の姿や考え方、生き方に触れる機会を生活科や総合的な学習の時間に意図的に位置付け、大きな成果を収めてきたところである。しかし、最近の新聞報道等では、将来の夢や希望をもてず、社会の変化に対応できない子どもたちが特集で取り上げられるなど、子どもたちのキャリア発達が十分に促されていない現状が見られる。このような現状から、将来の夢を実現することや、進路選択には、今の日常生活の在り方を見直し、その実現に向けて努力する資質を育む指導の必要性を感じる。そこで、本年度は、昨年度の成果を生かし、児童生徒の基礎的・汎用的能力について再び実態調査を行い、課題となっている能力の育成を中心に、子どもたち自身の普段の生活の在り方、生き方を考えさせるキャリア教育を進めることで、キャリア発達を促していきたいと考えた。

このことにより、全体研究主題である『「生きる力を育む教育活動の創造」～自ら考え、判断し、行動できるみやぎっ子の育成をめざして～』に迫ることができるであろうと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

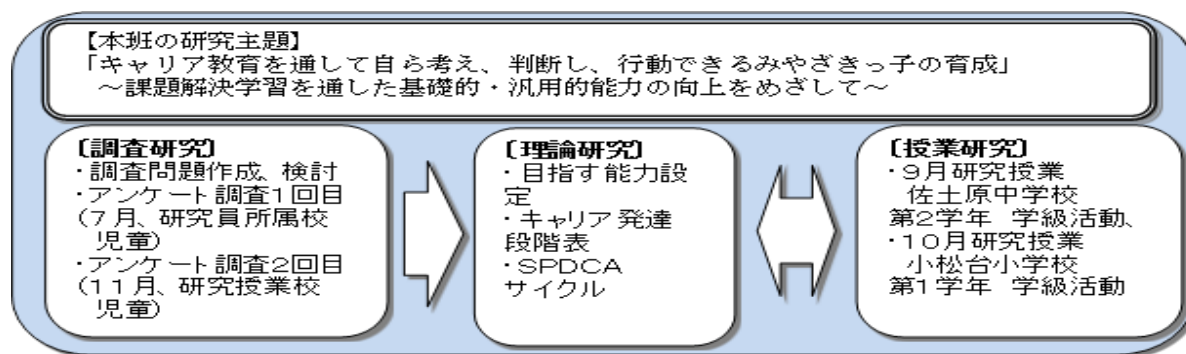
キャリア教育を通して、自ら考え、判断し、行動できる児童生徒を育成するために、「基礎的・汎用的能力」を高める指導の在り方を究明する。

IV 研究仮説

発達の段階に応じた指導計画を作成し、SPDCAサイクルを取り入れた課題解決学習を行え

ば、児童生徒の「基礎的・汎用的能力」を向上することができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 実態調査

(1) 調査の意図

児童生徒のキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の4つの能力において、課題となる傾向を明らかにする。

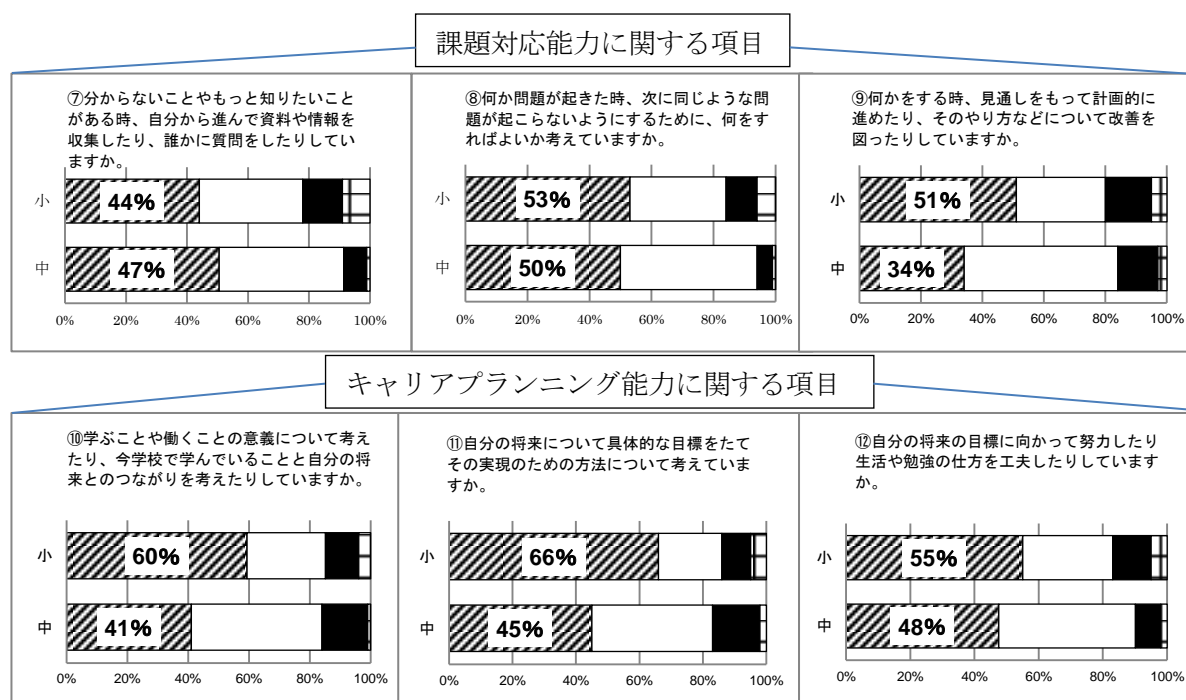
(2) 調査方法

調査項目は、「小学校キャリア教育の手引き」を基に作成した。小・中学校の各発達段階でキャリア発達における課題の特徴を踏まえ、4つの「基礎的・汎用的能力」に対して3項目ずつ設定し、実態調査を行った。

(研究員の所属校：小、中学校6校、計525名、実施時期：7月)

(3) 調査の結果分析

▨よくあてはまる □あてはまる ■あまりあてはまらない ◻あてはまらない



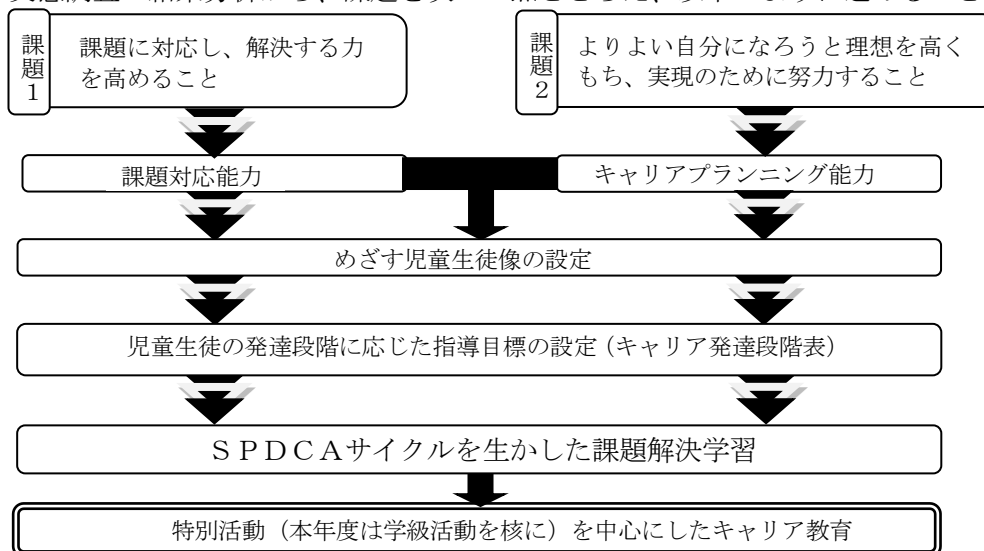
【図1 キャリア教育実態調査結果（一部）】

実態調査のうち、「よくあてはまる」という選択肢の回答割合が低かった⑦から⑫の結果をまとめたものが【図1】である。「課題対応能力」に関する質問では、特に、小学校では⑦、中学校では⑨が低かった。このことから、発達の段階に応じながら、特に小学校では、情報選択・処理、中学校では計画立案、実行、評価・改善などの課題解決能力を高めていく指導を、より充実させる必要があると考える。

また、「キャリアプランニング能力」に関する質問⑩、⑪、⑫については、小学校では総じて高い傾向にあるものの、中学校になると、割合が低くなっている。中学生になり、自らの進路に対して向き合う機会が増えてきたことで、より現実的な見方をするようになったことが原因として考えられる。「キャリアプランニング能力」に関しては、児童生徒が理想実現に向けての思いや願いをもち続けられるような発達段階に応じた指導の工夫や、小学校段階から段階をおった社会的・職業的自立に向けての資質や能力の育成が必要であると考えます。

(4) 本年度の研究の方向性

実態調査の結果分析から、課題を次の2点ととらえ、以下のように進めることとした。



本研究では、次のような理由から特別活動を中心にキャリア教育を進める。

- ・ 課題1、2で示したような課題に向き合い、個性の発見や理解、社会性の育成といった特別活動で育成すべき資質や能力は、キャリア教育がめざす方向性と重なる。
- ・ 特別活動は教科や他領域との関連が大きく、特別活動でのキャリア教育の効果を教科や他領域に転移させたり、教科等との関連性を生かしたりすることができる。また、中学校では、キャリア教育の中核をなす進路指導が学級活動や朝の会・帰りの会で行われることが多い。小学校でも特別活動をキャリア教育の中心に位置付けることで小・中一貫したキャリア教育の充実を図ることができる。

2 めざす児童生徒像

課題を基にめざす児童生徒像を以下のように設定し、研究を進めることにした。

【表1 「基礎的・汎用的能力」の育成をめざす児童生徒像】

能力名	本研究班のめざす児童生徒像
人間関係形成・社会形成能力	他者を尊重・理解し、その場に応じた言動がとれ、他者と協力できる児童生徒
自己理解・自己管理能力	自分自身のよさに気付き、よさを発揮するとともに、自らを律しつつ、主体的に学び、行動する児童生徒
課題対応能力	これまでの自分を振り返り、自ら課題を見付け、情報を適切に判断・選択し、思いや願いをもち、見通しをもって解決しようとする児童生徒
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、集団における自己の役割や責任を果たすことに喜びを見出す児童生徒

3 特別活動（学級活動）を中心としたキャリア教育について

(1) キャリア発達段階表について

キャリア教育において、児童生徒一人一人の将来的な社会的・職業的自立に向け、必要な能力や態度を育てていくためには、発達課題に応じた指導を段階的に行うことが大切である。すでに、各学校においては、キャリア教育の年間指導計画を作成し、指導に当たってきている。今回の研究では、「基礎的・汎用的能力」が各学年段階でどのような姿として表出していくことが望ましいのかをより具体化するためのキャリア発達段階表【図2】を作成した。段階表を用いて、各学年におけるキャリア発達の様子を具体的に把握することで、指導の方法をより明確にしていくことができると考えられる。【図2】の矢印で示してあるように、各学年で関連のある能力や態度を意識し、系統性を踏まえた指導を行うことで児童生徒のキャリア発達が促されていくと期待できる。

基礎的・汎用的能力	低学年	中学年	高学年	中学校
A 人間関係	ア 友達と仲良く遊び、助け合う。 イ あいさつや返事をする。 ウ 自分の考えをみんなの前で話す。	ア 友達のよいところを認め、励まし合う。 イ 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ウ 友達の気持ちや考えを理解しようとし、友達と協力して、学習や活動に取り組む。	ア 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 イ 異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。	ア 他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 イ 人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ウ リーダーとフォロワーの立場を理解し、チームを組んで互
D キャリアプランニング	ア 身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心をもつ。 イ 係や当番の活動に取り組み、それらの大切さが分かる。 ウ 家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 エ 自分の好きなもの、大切なものをもつ。	ア 将来の夢や希望をもつ。 イ いろいろな職業や生き方があることが分かる。 ウ 係や当番活動に積極的にかわり、働くことの楽しさが分かる。 エ 互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 オ 日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 カ 自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。	ア 憧れとする職業をもち、今、しなければならないことを考える。 イ 身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ウ 施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦労が分かる。 エ 学んだり体験したりしたことと、生活や職業との関連を考える。 オ 社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 カ 仕事における役割の関連性	ア 将来の職業生活との関連の中で、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 イ 体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 ウ 日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 エ 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 オ 自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をしようとする。

【図2 キャリア発達段階表(一部)】

(2) キャリア発達段階表と学級活動年間指導計画との関連

さらに、【図2】に示したこの段階表を基に【図3】の年間指導計画を作成した。

(1) 第1学年学級活動年間指導計画
① 第1学年学級活動年間題材一覧

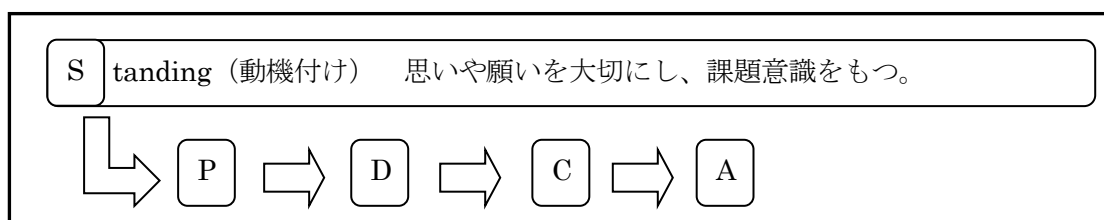
月	題材名	指導要領の内容	指導のねらい	段階表との関連
4月	友達をつくらう	2	【図4】の段階表に示した能力と関連のある項目を示し、キャリア教育の視点を意識した指導ができるようにした。	課(ア) キャ(エ)
	みんな仲良く	1		課(イ) キャ(エ)
	気持ちのよいあいさつ	2		課(ア)
	学校のやくそくを知ろう	2		課(ウ) キャ(イ)
	友を知ろう	2		課(エ) キャ(ウ)
6月	歯みがきの仕方を知ろう	2	正しい歯磨きの仕方を知り、学んだことを実生活に進んで生かそうとする。	課(ア)
	プールを使い方を知ろう	2	正しい歯磨きの仕方を知り、学んだことを実生活に進んで生かそうとする。	課(イ)
	プールを使い方を知ろう	2	正しい歯磨きの仕方を知り、学んだことを実生活に進んで生かそうとする。	課(ア)

【図3 学級活動年間指導計画 題材一覧(一部)】

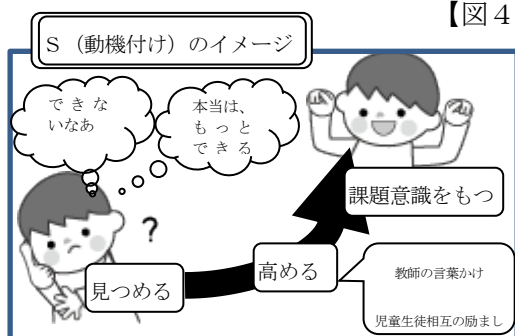
作成の際は、その題材で中心的に育成する能力を【図3】（ポイント1）のように示した。例えば、4月の「名しこうかんをしよう」では、紹介の活動を通して「自分の好きなもの・大切なものをもつ」というキャリアプランニング能力にかかわるものを重点的なポイントとして位置付けた。また、【図3】（ポイント2）のように、従来位置付けられていた題材をキャリア教育の視点から見直し「手洗いに気を付けよう」から「手洗い名人になろう」と修正し、課題に対して主体的に解決することをねらいとして再設定した。

(2) SPDCA サイクルを取り入れた課題解決学習

研究の方向性で示した課題1「課題に対応し、解決する力を高めること」に対する手立てとして、PDCA サイクルを取り入れた課題解決学習に取り組むことにした。P（計画）D（実行）C（評価）A（改善）と学習を展開することで、児童生徒の課題解決力を育成できると考える。また、課題2に示した「よりよい自分になろうと理想を高くもち、実現のために努力すること」については、思いや願いをもたせる場や課題意識をもたせる手立てが必要である。そこで、従来のPDCA サイクルに【図4】のようなS（動機付け）の段階を加えたSPDCA サイクルの活用を行うことにした。



【図4 SPDCA サイクル】



S（動機付け）の段階では、左図【イメージ】のように、できる自分と、できない自分を【見つめる】場を設定する。現状をしっかりと見つめさせた上で、教師の言葉かけや児童生徒相互の励ましなど、意欲を【高める】手立てを講じることで、課題に対して主体的に頑張ろうと努力するための課題をもつ段階に導くようにした。さらに、S（動機付け）の段階でもった課題意識

をワークシートに書くことで、あらためて自分の内面を掘り下げ、自覚させるようにした。また、このワークシートを課題解決の際、何度も確認させることでより主体的に取り組めるようにした。

4 授業研究

今回の研究では、以下の3つを視点に、検証授業を行っていくこととした。

- 視点1 キャリア発達段階表との関連をもたせた指導計画づくり
- 視点2 S（動機付け）を高めるための手立て
- 視点3 思いや願いをもち続け、より主体的に活動に取り組むための書く活動

(1) 小学校における検証授業（小松台小学校 第1学年）

ア 検証授業の概要

題材 学級活動 かかりのおしごとめいじんになろう
内容 (2) エ 清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解

視点1 キャリア発達段階表との関連をもたせた指導計画づくり

本題材の内容をキャリア発達段階表と照らし合わせてみると、低学年Dのイ「係や当番の仕事に取り組み、それらの大切さが分かる。」Dのウ「家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。」と特に関連が深いと考えられる。そこで、本時のねらいの中に「活動の様子の振り返りや、係活動にどのように取り組んでいくかを考えさせることを通して」という文言を加え、指導を進めていくことにした。

サイクル	手立ての具体的内容	指導時期
Standing (動機付け)	○ 係活動の再設定、係の分担 ・ これまでの係活動について振り返り、係活動の再設定・分担を行う。	学級活動 (事前)
	○ クラスメイトから各係へのメッセージカード (いいところみつけカード) の活用 ・ 児童の係活動に対する思いや願いを高めるため、児童が相互に係活動の様子を評価できる仕掛け (いいところみつけカード) を取り入れる。	視点2 S (動機付け)
Plan (計画)	○ 新しい係でのめあての設定 ・ どのように係活動に取り組むかを明確にさせるため、自分のめあてをワークシートに書かせる。	視点3 書く活動
Do (実行)	○ ワークシートの活用 ・ 児童の意欲を継続させるため、ワークシートの中に「めいじん」欄を設け、係活動をしたらシールを貼るようにした。	日常指導 帰りの会
Check (評価)	○ 係活動の振り返り ・ ワークシートに書いためあてに対して、取組がどうであったかを振り返る時間を設ける。	学級活動 (事後)
Action (改善)	○ 新しい係分担 ・ 新しい係分担を行い、振り返りを次の活動に生かせるようにする。	

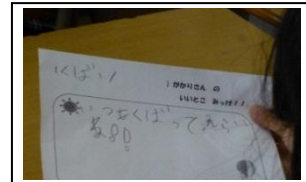
視点2・3 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動 【キャリア教育に関わる能力】	指導上の留意点 【キャリア発達段階表との関連】
導入 10分	1 それぞれの係活動の様子について振り返る。 2 本時のめあてをつかむ。 めざせ、にじいろがっきゅう！ ～かかりのおしごとめいじんになろう～	・ 事前に撮っておいた写真と、いいところみつけカードを使って、各係の活動の様子を振り返る。 ・ 活動が足りなかったことへの批判とならないよう、がんばっていたこと、他の係からの称賛などを取り上げるよう留意する。 ・ これまで以上に係活動に意欲的に取り組もうとする態度を育てるために、「かかりのおしごとめいじん」になることをめあてとする。
展開 30分	3 「かかりのおしごとめいじん」について考える。 【キャリアプランニング能力】 ・ どのように仕事をする人か 4 係活動への取組について話し合う。 【課題対応能力】 ・ 話し合い→発表	・ 以後のめあてを決める活動の際、より具体的にイメージがもてるよう、「おしごとめいじん」とはどのような人のことを言うか考えさせる。 【段階表低学年Dのウ】 ・ 「おしごとめいじん」の条件をもとに、今後の係活動にどのように取り組んでいくか、話し合わせる。 →図5、6 視点2 ・ 各係にいいところみつけカードを配る。 ・ いいところみつけカードを見て、どのような気持ちになったかを何人かの児童に発表させる。
	視点3 5 自分のめあてを決める。 【キャリアプランニング能力】 ・ 自分のめあてを考え、ワークシートに書き込む。 →図7 ・ 記入→発表	・ これからの係活動への取組で、もっとがんばりたいことを具体的に書くよう促す。 【段階表低学年Dのイ】
終末 5分	6 本時の学習を振り返る。 ・ ワークシートに書いたことを振り返り、今後の係活動への意欲付けを図る。	・ 一人一人が書いた内容を認め、これからがんばっていこうという意欲を大切にする。 ・ ワークシート下部の「めいじん」欄について説明し、意欲付けの一助とする。

イ 授業の実際

視点1

○ キャリア発達段階表との関連から「役割の必要性」を考えさせることを指導の中心にすえた。単に係を決めるのではなく、「おしごと名人になろう」をめあてに、働くことの意義を考えさせる展開にしたことで、児童一人一人が、より確かなめあてを立てることができた。



【図5 いいとこみつけカード】

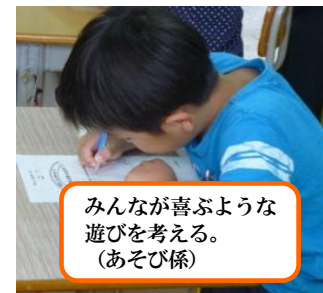
視点2 視点3

○ まず、「かかりのお仕事名人になろう」というめあてのもと、これまでの係活動の様子を振り返り、「どんな仕事をする人が名人なのか」考える活動を行った。1年生という発達段階では、自分の係活動の取組を客観的にとらえるのは難しいため、記録しておいた写真などを見せることで、それぞれの係活動について見つめ直すことができていた。そして、【図5】の「いいとこみつけカード」を見せ、互いの活動が皆の役に立っていることを知らせることで、児童は役割を果たすことの意義を1年生なりに感じ取っていたようである。書く活動では、【図7】のように、「みんなのために何ができるだろう」「どうすれば役に立てるだろう」と、意欲をもって自分のめあてを決めることができていた。



【図6 カードを読む児童】

その後の係活動では、自分の仕事に責任をもって取り組むことができるようになった児童の姿が見られた。



【図7 めあてを書く児童】

(2) 中学校における検証授業 (佐土原中学校 第2学年)

ア 検証授業の概要

題材 学級活動 クラス合唱を成功させよう

内容(2) イ 自己及び他者の個性の理解と尊重

視点1 キャリア発達段階表との関連をもたせた指導計画づくり

本題材の内容をキャリア教育発達段階表と照らし合わせてみると、中学校Cのア「よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自分の課題を見出していくことの大切さを理解する。」、Cのイ「課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。」、Dのア「将来の職業生活との関連の中で、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。」が特に関連が深いと考えられる。そこで、本時のねらいに、「自己の内面を見つめさせるとともに、自己実現のために目標をもって行動しようとする」という文言を加え、指導を進めていくことにした。

サイクル	手立ての具体的内容	指導時期
Standing (思いや願い)	○ 各役割の立場から全体に向けてのメッセージ ・ 役割を通して、クラスメイト全員で合唱を成功させたい、学級目標を達成させたいというメッセージを伝える場を設定した。	視点2 S (動機付)
Plan (計画)	○ ワークシート ・ 合唱内容の課題点に対し、他者へ原因を求めるのではなく、自分の内面の原因や他者への関わり方を考え、活動に前向きな気持ちで向き合うための場を設定した。	視点3 書く活動

Do (実行)	○ 文化発表会（合唱コンクール） ・ 個人の活動計画（アクションプログラム）の意識や学級目標を基に臨むよう示唆した。	文化発表会
Check (評価)	○ ワークシート ・ 個人の活動計画（アクションプログラム）を振り返り、自己評価する。 ○ 学級活動 ・ クラスメイトに向けて、自分の感じたことを伝える場面を設定する。	学級活動 (事後)
Action (改善)	○ ワークシート ・ 振り返りと共に、改善できる点を明記した。	

視点2・3 学習指導過程

段落	学習内容及び学習活動 【キャリア教育に関わる能力】	指導上の留意点 【キャリア発達段階表との関連】
導入 5分	1 クラスの取組を振り返る。 2 本時の目標 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">団結の虹の橋を架けよう！ クラス合唱成功のためのアクションプログラムについて考えよう</div>	<ul style="list-style-type: none"> 前時との関連を図るために、体育大会やクラス合唱の目的を提示する。 本時の見通しをもたせるために、板書カードを提示し、目標達成に向け、原因を探ったり、アクションプログラムについて考えたりすることを伝える。
展開 35分	3 合唱練習の取組を振り返る。 (1) 課題点、できている点を見つけ、班で発表する。 【課題対応能力】 (2) 目標と現状にあるギャップについて、自分の気持ちを考える。 4 クラス合唱の目標達成について、再度、自分の気持ちを考える。 →図9	<ul style="list-style-type: none"> 学級目標達成を目指して、自分の課題を見出せるよう考えさせる。 【段階表Cのア】 クラスの一員として、自分が出来る役割を考えさせる。 【段階表Dのア】 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">視点2 ・ 目標達成に向け、指揮者等の役割をもつ生徒が、意欲や前向きに考える気持ちを伝える場を設ける。 →図8</div>
	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">視点3 5 クラスのために、自分ができることを考える。(アクションプログラム) 【キャリアプランニング能力】 →図10</div>	<ul style="list-style-type: none"> 自分の課題に向き合い、具体的に課題点の解決策を考えさせる。 【段階表Cのイ】 クラス合唱に自ら実行できるよう、具体的な項目を考えるよう促す。
終末 10分	6 本時についてまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> いつまでに何をすればよいかを、明確に把握できるよう、文化発表会までの日程を掲示する。

イ 授業の実際

視点1

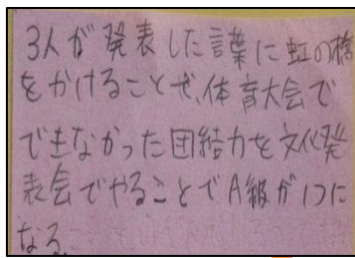
- 指導者が小学校からの各学年におけるキャリア発達を、具体的に把握できたことにより、授業のねらいをより明確に設定することができた。

視点2 視点3

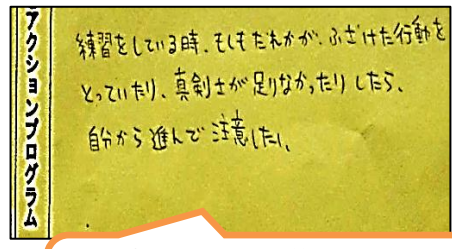
○ 本時は、体育大会での自分たちの行動の振り返りから行った。そして、同じ学校行事である合唱大会に向けて、現在の自分たちの取組を見つめる時間を設けた。ここでは、「人任せにしている自分」「何とかクラスのために頑張りたい自分」をそれぞれが感じとっていたようであるが、まだ心の奥底から発言している生徒は少なかった。しかし、視点2で示した指揮者等の役割をもつ生徒が自分の考えや思いを発表する場面【図8】では、同じ学級の友達が本音を精一杯に語る姿を見て、生徒一人一人が、課題点を他者ではなく、自分の原因として捉え、主体的に行動していきたいと、高い課題意識へと変容する姿が見られた。【図9】は、発表を聞いた生徒が書いた言葉である。このように意識に変化が見られた。そして、全員が課題解決に向け、自分の具体的なアクションプログラムを作成することができた。【図10】



指揮者は、みんなと離れたところにいる。だけど、心はみんなと一つになりたい。楽しいことも、苦しいことも一緒に乗り越えて、ひとつにまとまっていこう。



うまくいかない原因を前向きにとらえようとする意欲や気持ちに転換できた。



できないことを、他人のせいにならず、自分自身のあり方を改めようとする記述が見られた。

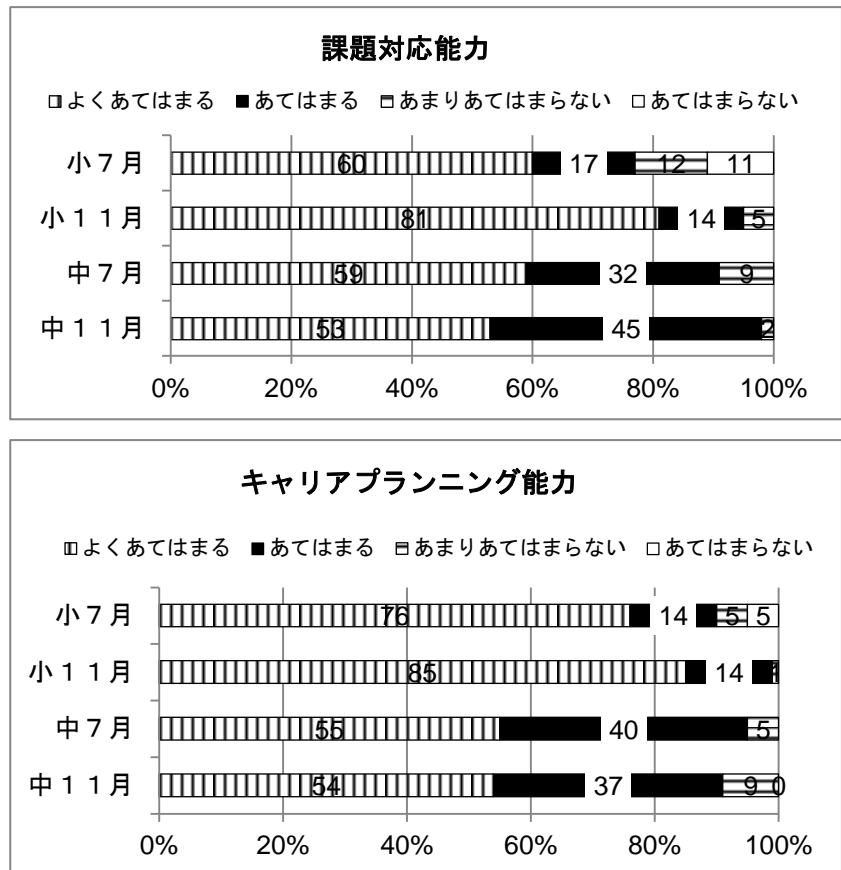
【図8 指揮者からのメッセージ】

【図9 メッセージを聞いた後の記述内容】

【図10 アクションプログラムの内容】

5 児童生徒の変容

検証授業実施校において、11月に2回目の実態調査を実施した。【図11】は、紀要p11-12に記した質問をそれぞれの能力ごとにまとめたものである。課題対応能力とキャリアプランニング能力について、7月から11月の変容を見たところ、小学校では、どちらも「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた児童の割合が上昇した。中学校では、課題対応能力では「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した生徒の割合が上昇したが、キャリアプランニング能力では、その割合が4%減少した。



【図11 アンケートの結果】

VII 成果と課題

1 研究の成果

本年度は、「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」を育成するために、特別活動（学級活動）をキャリア教育の視点から見直し、次の2つの手立てに取り組んだ。

1つ目は、目指す児童生徒像を設定するための段階表の作成である。すべての教育活動においては、まず指導者自身が、目の前の子どもたちにどんな能力を育成していくのか明確にしていくことが不可欠である。段階表の作成が、目指す児童生徒像を設定するための1つの指標となったのではないかと考える。また、この段階表により、特別活動（学級活動）の年間指導計画を見直し、意図的にキャリア教育を進めることにつながったと考える。

2つ目は、SPDCAサイクルを通した課題解決学習である。とりわけ、「S（動機付け）」の段階を意識させることで、課題解決への目的意識が明確になり、児童生徒がより意欲的に活動に取り組むようになったのではないかと考える。

事後のアンケートからは、特に「課題対応能力」の高まりを見てとることができる。今年度は、特に学級活動を通した課題解決学習の場を設定してきか、授業後の生徒の感想には、「みんなをリードすることができるようになった」「周りを見て行動するのではなく、自分から行動できるようになった」など、SPDCAサイクルを通した課題解決学習により、少しずつ子どもたちの意識に変容が見られるようになった。学級集団の課題解決に向けた取組が、そのまま個人の成長を促し、それがまた学級の活動に反映される、という好循環が生まれたと考える。

このようなことから、本研究のねらう特別活動（学級活動）を中心にしたキャリア教育活動は、児童生徒の「課題対応能力」の育成という点において、一定の効果を上げることができたと言えるのではないだろうか。

2 研究の課題

「キャリアプランニング能力」の育成は、「課題対応能力」の育成に対し、思うような結果を得ることができなかった。現段階では、児童生徒に将来的な社会的自立・職業的な自立に向けての明確な意識付けを行うまでには至っていない。このことから、今後「キャリアプランニング能力」の育成については、学級活動の授業だけでなく、各教科・領域、朝の会・帰りの会など、あらゆる機会をとらえて指導していくことが必要である。

引用・参考文献

「小・中学校キャリア教育の手引き」（文部科学省 平成23年5月）
初等教育資料平成26年9月号「学級活動における問題（課題）解決的な活動過程の工夫」
「宮崎県キャリア教育ガイドライン」（宮崎県教育委員会 平成25年1月）
「キャリア教育の手引き」（岩手県教育委員会）

研究同人

所長	江藤 宏			
指導主事	酒井 昭弘			
研究員	横山 登	（宮崎市立檜小学校）	増岡 三四郎	（宮崎市立宮崎東中学校）
	河添 大輔	（宮崎市立清武小学校）	毛上 昌也	（宮崎市立高岡中学校）
	松田 由佳	（宮崎市立小松台小学校）	外山 敦子	（宮崎市立佐土原中学校）